
嘘をついた。かなり自分に損になる嘘を。

雷雲

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘をついた。かなり自分に損になる嘘を。

【Zコード】

Z3818P

【作者名】

雷雲

【あらすじ】

中学一年の佐藤浩太は佐々木麗美に恋心を抱いていた。

ある日、佐藤浩太は下校中の時に男と佐々木麗美が共に居る事を発見する……

馴文ですか宜しくお願いします。

俺は牛乳を一気飲みして鞄と冷めてしまつた食パンを持ち、玄関で靴を履いていた。

タイムリミットは俺の母親が自室を覗くまで。あれが見つかって捕まえられたら一巻の終わりだ。

「何急いでるのよ。あ、まさか……」

母親が階段を駆け上がる。早く家を出たほうがよさそうだな、こりや。

やばい、気付かれた。さつさと行こい。

俺は扉を開けて「いってきます」と言つて家を出た。いねぐら二
言つておかないと後のお叱りがもつとやばくなる。

俺はコツコツコツと階段を駆け下りて次の階段へと続く約150mの下り坂を走って行つた。

前までは結構きつかつたが最近は慣れてきたのか息が切れなかつた。

陸上部に入るつかな……

でも棒高跳びもあるしな……

俺は平均ぐらいの身長だからな……

そんな事を考えながら次の階段を下つていると後ろからクラスメイト以上友達以下の奴が来た。

「よつすー！」

「……おひ。」

「なんだ！ 元気ないなー」

大きな目に濃い眉毛、鼻筋は……普通。たらこ唇のこじつは鈴木健。

「イツのレンショーンには毎回疲れる。なぜか俺の登校時間と二つの登校時間は決まって同じなのだ。

まさか監視してるとか……んなわけないな。

「それであ……昨日発売された新作ゲームの

」

また始まりやがった。鈴木健のネタばれ情報。

鈴木の父親はどつかの大企業の社長らしく、家は豪邸でかなりの金持ち。その唯一の息子であるこいつはその有り余った金をゲームに使って、一ヶ月に五個はゲームを買う。そして新作ゲームが出た時はすぐに予約して、発売日にはすぐに行列に並ぶ、かなりのゲームだ。（本人談）

そんなどうでもいい話を聞きながら、俺は学校へと向かうのだった……。

学校。

勉強だけの理由では絶対行かないこの場所。

そここの廊下に俺は立っているのだった……。

俺がこの場所にいる理由は後ろの教室にいる同じ学年の佐々木麗美と言う女の子。その横にある鞄では特大の人気キャラクターのストラップがぶら下がっている。

その人と会つたのは入学式で偶然隣に座つたとき。俺は幸運だと思つていた。

一瞬でこの人が好きになつた。一目ぼれと言つことだ。

俺はこの人と学校にいたいと言つ理由でこの場所に来ていた。

彼女は友達と雑談を楽しんでいる。一瞬彼女の視線がこちらを向く。

その一瞬が永遠になればいいのに。そう思いながら僕は視線を逸らした。

俺が視線を逸らした理由は彼女に俺の気持ちを知られたくないから。もし知られたら彼女はおそらくただでさえ少ない俺との交流を避け、そのまま卒業式を迎ってしまうだろう。そんなことは嫌だ。

俺の気持ちを一生彼女に伝わらないかも知れない。だけど、同じ場所で居れるこの時間は大切にしたいのだ。

彼女は絶え間なく雑談を続ける。俺はそれを見て、窓から外の風景を覗いた。

外は山と森ばかりで麓には小さなアパートや公園が多数あった。その右端ぐらいに俺の家が見える。

空気は澄んでいて都會とはかけ離れた風景だ。後ろの窓からは小さな町が見えるだろ？。

「田舎ではないが、まあ普通の田舎だ。俺が生まれてから親は都會からこっちに引越したらしい。俺には何故そうしたかいまだ分からぬ。」

窓から見える風景を見ながらボーッとしていると、横からまた別のクラスメイト以上友達以下の別の奴が来た。

「俺に親友は居るのか？……いや、いないな。」

「なあ、俺が貸したあのゲーム、まだ返してもらつてないぞ」

「ああ、そうだった。こいつから格闘ゲームを借りてたんだつた。」

「あ……明日返すよ」

「それ昨日も一昨日も聞いたぞ。」

「言つたつけ？まあいいや……」

「大丈夫。明日には必ず返すよ。」

「それ、昨日聞いた。」

「これも言つたような気がしない。」

「……明日には絶対返すよ。返せなかつたら弁償すつからせ。」

「その言葉絶対忘れないからな」

その超しつこい奴は隣の教室へと入つて行つた。それにしても、何故あんなことを言つてしまつたんだ俺は。

……取りあえずメモ帳に書いておくか。

俺はポケットからメモ帳とペンを取り出し、メモ帳に11月20日に鉄拳をしつこい奴に返すと書いて、教室へと向かつた。

下校。

これほど嬉しい時間は他にはない。やつとゲーム三昧できる家へと向かえるのだ。

俺は学校から飛び出し、駆け出した。

それにしても疲れた……やつぱ走れないわ。

俺は走るのをやめ、歩くようになつた。それでもまだ息が切れてい
る。

俺が右へと角を曲がらうとした時、あの彼女がいた。

なんでここに？ あいつの家はここから反対方向にあるはず……
(こつそり確認済み)

その時、高校生ぐらいの髪を赤色に染めた男が彼女に寄ってきた。
そして楽しげに話しあつ。

まわかの彼氏ですか。

俺はしゃがんで物陰に隠れこつそり見ていくことにした。

彼女は鞄を持っている。下校時にあの男と会つたらしい。

憎たらしい……なんであんな不良みたいな奴と！　俺の方がよっぽどいいぞ！

心の中で叫んでみたが、俺は自分がよっぽどこいつ自信は無いことに気付いた。

馬鹿だな……俺。

そんなことより、俺は高校生が酔つたよつてフランフランしてこむことに気付いた。

本当に酔つてるかもな。あんな不良みたいな奴は。その時、男がバイクに寄りかかりバイクはその重量で倒れてしまった。

そしてなんと男は彼女をバイクの方へ押し倒して逃げてしまった。

やばい……あいつに殺意持つちゃつた。

彼女もすぐさま周りを見て逃げて行く。

……まあバイクは一人じゃ持ち上げられないから当たり前だよな。
種類によるけど。

その一分後、どつかの集団がバイクに集まってきた。

巨体の男がフェンスに蹴りを入れる。

あれは……暴走族？

……ヤバいな。

俺はその場から離れることにした。

帰宅。

これほど嬉しい時間は他にはない。（ちょっと前言つたよつな…

…）

だけど、今日はいやなものがおまけでついていた。

「さて、理由を聞かせて。」

拷問らしき感じの母親の説教。俺はそれを半分聞き流し、自室へ行つた。

自室はかなり汚い。床にプリントが散らばつている。

俺はプリントを角に寄せて、椅子にもたれかかつた。

あの暴走族たち、今はどうしているだろうか……

彼女の事を見ていなればいいが……

それにしてあの赤い髪の男はなぜ彼女を押したんだろう。

やはり捕まりたくなかつたからか……そして彼女を置いてきぼりに……

彼氏失格だな。

「っしゃああああああああああああーー！」

あつ、声に出しちけしまつた。まあいいか。

「御飯よ～～

俺は立ち上がり扉を開けて階段を下りてコンビングへと向かった

朝。

窓から明かりが差し込み、俺は目を覚ます。

俺は横に置いてある音楽プレーヤーに繋いであるヘッドホンをつけ、ベッドから起きた。

かかっている音楽は結構激しい曲で、田舎じみた丁度いいかも
しない。

そして俺は黙々と部屋を片付け始める。昨日あの説教で絶対片付けることを約束してしまったからだ。

十分後、俺は掃除を終わらせ、下へと降りた。

「おはよう。」

母親がそう言つたのよね、あの音かぎすると

「掃除してきたのよね、あの音かぎすると返す。」

「ああ。」

俺は椅子に座り、机にあつたパンを食べ始める。

「あ、そういうえば」

俺は階段を上がり、自室に戻った。そして棚に置いていた格闘ゲームを机に置いていた鞄に入れて、その鞄を持ってリビングへと戻った。危うく忘れる所だった……

「どうしたの?」

「いや、なんでもない」

俺はコップに注がれた牛乳を飲み干し、洗面台へと向かった。俺の顔が鏡に映る。

一キビが気になるな……

俺は歯を磨いて、顔を洗つた。そしてまた自室へと戻つた。

俺は制服に着替え、すべての準備を終わらせた。

あ～だるかつた。

俺は家を出て階段を降りた。そのまま坂を下りて一度目の階段を降りる。

鈴木は……いた。階段の下で待つてる。

……違う道に行こう。

俺は坂を上がり、森の坂道へと向かつた。右には人気のない寺があり、昼でも薄暗い。

そこにあの昨日いた暴走族がいた。その巨体の男が俺に近づいてきた。

「これを持ったやつを探してるんだが…… しらねえか？」

男が持っていたのはあの彼女が持っていたストラップだった。

このままこいつらが探し続けるといつか必ず彼女がバイクを倒したことになるだろう。

そうなつたら彼女が暴行を受けることは目に見えている。

俺は次の言葉を言った。

「俺が……持つてる。」

「こんな趣味をしているとは変わったもんだ……」

俺はそのまま相手から暴行を受けることになつた。

十分後。

ドサツ……

「ぐつ……」

「中身は取らなかつたんだから感謝しり。じやあなた

俺は所々にあざができるだらう。

血がついた口を手で拭き、近くの公園へと向かつた。

俺は嘘をついた。かなり自分に損になる嘘を。

だが、それでもいい。彼女を守つたのだから。

それなら悔いはない……

俺は後に一ヶ月病院に留まることとなつた……

嘘は人が生きていれば必ずするものである。

一生嘘をつかない人間などいない。

そして嘘は何かを守るためにとつての大切な感情から表れる行動である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3818p/>

嘘をついた。かなり自分に損になる嘘を。

2010年12月9日00時22分発行